

一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の実像

松岡 勲

はじめに

「イヤです！通信 第二〇号」（二〇一〇年九月二五日）に靖国神社遺児参拝文集『靖国の父を訪ねて 第二二集』（一九五九年三月二〇日発行）が出てきた経緯と当時の大阪府で靖国神社遺児参拝がどのように行われていたかを書きました。その後、田中伸尚さんに私の聞き取りをしていただき、「世界」（二〇一〇年二月号）に「戦後も『少国民』にされていた／靖国参拝遺児と合祀拒 原告の『再会』」を書いていただきました。ここでは、田中さんの「世界」（二月号）の内容とできるだけ重複をさけて、靖国文集発見後に私が遺児参拝について調べたことをまとめ、その実像に迫りたいと思います。

大阪府の遺児参拝

私が大阪府の遺児参拝を調べるために訪れたのは、大阪府公文書館、大阪府立図書館（中央、中之島）・大阪市立図書館・岸和田市立図書館等の図書館及び遊就館靖国偕行文庫でした。大阪府公文書館で見つけた公文書は学事課関係の「遺児靖国参拝について」で、一九五二年に「講和発効記念事業の一つとして」遺児参拝が始まっています。文書は一九五二年、一九五五年、一九五六年のみしかありませんでした。テレビのドキュメンタリー番組

で見るアメリカの公文書館の徹底的な文書保存と較べて、日本の公文書館の文書保存はなんと貧弱であるかと驚きました。

この文書と各図書館に分散している靖国文集、遺児参拝を報道した当時の新聞記事、大阪府公文書館所蔵の知事室広報課撮影の写真等を総合すると、遺児参拝はこの後一九五九年の第一四回まで続きました。一九五七年までは春秋年二回の参拝が行われ、私の参加した第一三回の遺児参拝が一九五八年夏の一回です。一九五八年から年一回に変わったことが分かります。（表一「靖国神社遺児参拝表（大阪）」参照）

一九五七年までの春秋二回の参拝の参加人数の合計は、初年度の約五四〇名から始まり、一九五七年には一〇〇〇名強の多くになっています。年一回の参拝になった一九五八年には一度に一〇〇〇名近くも参加しています。

所要経費の負担は、初年度の場合、「一人宛参拝諸経費の補助として二千元（その範囲において実施する）」、「全額府において負担」となっています。地方公務員の当時の月額初任給は六五〇〇円ですから、大変大きな予算規模だったと思われます。なお、これと別に一九五三年七月から戦没者遺族の靖国参拝のために「国鉄（現JR）乗車券の五割引の制度」が始まっています。（田中伸尚著『靖国の戦後史』（岩波新書、四四ページ）

実施要領は「遺族」連盟の委託事業として運営に関しては連

盟に委嘱する」となっています。また、参拝する遺児は「靖国神社合祀済者の遺児に限る」となっており、私の場合、父の合祀が一九五七年で遺児参拝は一九五八年でした。遺児参拝は遺族連盟（後の遺族会）への委託事業ですが、実質は大阪府民生部世話課が切り盛りをしていたと思われます。

当時の新聞報道

当時、遺児参拝がどのように報道されたかを調べました。当時の新聞（大阪）が保存されているのは、大阪府立中之島図書館に「朝日新聞」「毎日新聞」（どちらもマイクロフィルム）、「大阪日日新聞」（本紙）、大阪府立中央図書館に「産経新聞」（マイクロフィルム）、大阪市立図書館に「朝日新聞」「毎日新聞」「産経新聞」の他に、「読売新聞」（マイクロフィルム）がありました。検索結果、次の様な記事がありました。

〈靖国神社遺児参拝（大阪）新聞記事〉

（朝日新聞）「きょう上京 遺児代表」一九五二年五月一〇日

「遺児代表東上」一九五二年五月一日

「元氣で行ってきます」喜びにみち

靖国の遺児上京」一九五二年一〇月二六日

（毎日新聞）「知事さんらに送られて 靖国参拝の遺児たち出発」

一九五二年五月一日

「けさ会える 靖国の父 遺児二八九名上京」一九

五二年一〇月二六日

「胸に亡き父の写真 靖国遺児二八九名参拝」一九

五二年一〇月二七日

「遺児五百名上京 靖国神社参拝へ」一九五四年
一月七日

（産経新聞）「靖国の対面へ遺児二五〇名 知事見送り 府の独立記念行事」一九五二年五月一日

「靖国の遺児“出発”一九五二年一〇月二六日

「遺児五百人が靖国神社参拝」一九五七年一月二
日

（読売新聞）「きょう出発 靖国神社参拝府下遺児代表」一九五
三年五月四日

「靖国の父」と対面に 五〇〇名の遺児出発」一
九五五年六月八日

「靖国の遺児ら上京」一九五六年一月七日

（大阪日日新聞）

「激励受けて出発 靖国の遺児らけさ上京」

一九五三年五月五日

新聞検索して分かったことですが、一九五二年の五月と十月の報道は、遺児参拝の初年度であり、各紙とも取り上げていますが、それ以降の報道は少なくなっています。このことから、当時遺児参拝がさほどの社会的関心を引かなかったと言えます。その意味では、一九五〇年代はまだ戦争の記憶が風化していき、靖国神社を肯定しない社会的雰囲気があったのではないのでしょうか。今とちがひ、まだ健康な時代だったのかも知れません。日本遺族会が、靖国神社の国家護持法案に精力的に取り組むのは、一九六九年になつてからのことです。しかし、日本国憲法施行からそう遠くな

い時期にも関わらず、遺児参拝を「政教分離原則違反」であるとした報道が全くありません。以下、一九五二年の第一回参拝の新聞報道を見てみます。

きょう夕方上京 遺児代表

〔朝日大阪、一九五二年五月一日〕
靖国神社に参拝する府下の遺児代表二百五十名は十日午後五時十分大阪駅発の列車で上京する。三泊四日の予定で十一日は靖国神社参拝、都内を遊覧バスで見学、十二日は国会議事堂見学、皇居を拝観して十三日午前十時五十五分大阪駅解散。経費いつさいは府が負担するほか看護婦、連盟役員、府吏員十三名が付添い、また期間中学校は欠席としないよう府教委から各学校長に指示されている。

靖国の対面へ遺児二五〇名 知事も見送り、府の独立記念行事

〔産経大阪、一九五二年五月一日〕
小雨そぼふる十日午後二十二分大阪駅発東京行列車で東淀川区豊里菅原町二二宮下義治君（一六）はじめ府下二百五十名の戦争遺児たちが赤間知事、西田府会議長らの見送りのうちに九段の森に眠る亡き父に晴れて対面出来る喜びを胸にふくらませながら上京した。

これは府の講和発効記念行事の一つで一行は十一日午前靖国神社で昇殿参拝したのち、同日午後は都内見物、十二日は国会見学、厚生大臣に面会したのち宮城を拝観、同夜離京十三日午前十時五十五分大阪着列車で帰阪する。

遺児参拝の写真

知事室広報課撮影の遺児参拝の写真が大阪府公文書館に所蔵されていました。以下はそのリストです。（これ以外に撮影年不明の写真が二種類あります。）

靖国の遺児上京壮行会	一九五六年月一六日
大阪遺児靖国参拝	一九五七年一月五日
靖国の遺児上京壮行会	一九五八年
靖国の遺児上京出發	一九五八年
靖国の遺児上京壮行会	一九五九年七月二日

そのうち私が参加した一九五八年の写真を二葉掲載します。写真一（天王寺公園での壮行会）、写真二（大阪駅での見送り）です。また、私のアルバムから写真三（靖国神社前の集合写真）を載せました。最後列右端が私です。天王寺公園の大阪市立美術館南での出發前の集会は立錫の余地がなかったことを覚えています。写真リスト中の一九五九年のものが、最終の参拝かどうかの確認はできませんでしたが、公文書・新聞記事・文集もふくめて検証できた一番最後の参拝です。

靖国文集『靖国の父を訪ねて』

一九五〇年代の遺児参拝の記録は靖国文集として残っています。確認出来るものは、北海道、岩手県、福島県、茨城県、大阪府、広島県、島根県、長崎県です。どの文集も『靖国の父を訪ねて』という同一のタイトルであり、全国的に同一歩調で遺児参拝

が行われたことが分かります。遺児参拝は一九五二年に始まり、一九五九年に一巡して終わっています。（表二「靖国文集表」参照。茨城県の場合、一ノ瀬俊也著『故郷はなぜ兵士を殺したか』角川選書、二二五ページ）

大阪府の靖国文集は、第一回目の一九五二年春の参拝については作成されていませんが、同年秋の参拝から文集が作成されています。これが第一集になりますが、この号は集番号はついていません。現在、公文書館、図書館、資料館等で確認できる文集は、第一集（一九五二年秋実施）、第二集（一九五三年春実施）、第三集（一九五三年秋実施）、第五集（一九五四年秋実施）、第六集（一九五五年春実施）、第九集（一九五六年秋実施）、第一〇集（一九五七年春実施）、第二二集（一九五八年実施）です。最後の年となったと推測される一九五九年は文集が作成されたかどうか不明です。

私が参加した一九五八年の第二三回参拝を記録した靖国文集（第二二集）は、参加者九七五人のうち八二五人が感想文を書いています。行きも帰りも夜行列車の三泊四日の旅で、靖国神社参拝は二日目の朝、旅館で少し休憩をして、午前八時に靖国神社の境内に入り、遺児たちは靖国神社の深閑とした雰囲気飲みこまれます。そして、本殿に昇殿して、祝詞の音が響き、玉串を捧げる神事等が続きます。神官の促し「さあ、あなた方たちのお父様と無言の対面です。心おきなく存分にお話してください。」があり、柏手が打ち鳴らされます。遺児たちの感想文を読むと、本殿の大鏡を覗いて、「お父様の顔が映っているようで」「知らぬ父の顔が現れて来たような気がした。」とかの表現が散見されます。そして、「この靖国神社は、お国のために亡くなられたあなた方のお

父さんやお兄さんの英霊がお祀りしてあります。此の国がある限り、あなた方のお父さんの名は後々まで残るでありましょう。」と宮司の話が続きます。父のいない悲しさと寂しさをずっと抱えこんできた子たちは戦死した父の「死の意味づけ」をこのようにして聞かされていたのでした。

一方、靖国文集は戦争の記憶が鮮明だった時代を反映し、母が再婚して祖父母に育てられている子ども、今はちがう父と暮らしている子ども、満州で父が戦死した子ども、フィリピンのレイテ島で父が戦死した子どもたち等、彼らの戦後の生活が写し取られています。また、感想文には「せめて一日でもいいから帰って来てほしい。」「ひよっこり帰って下さればどんなに嬉しい事だろうと思う。」という心情から、「靖国神社では、ほんとうに父を祀っているところではなく、父の名前を祀っているところだと思う。」という冷静な目、そして、「イヤです！通信」（第二〇号）で紹介した遺児参拝を痛烈に批判した大阪市内の女子生徒の文章まで掲載されています。一九五〇年代は非戦の社会意識がまだ強く存在し、その時代相を反映した自由度だったのかも知れません。

先にも述べましたように大阪府の遺児参拝は、年二回の参拝、年一回の参拝時のいずれも参加者数は一〇〇〇名にのぼる大人数でした。これだけ多数の集団行動ですので、大綱が打てても細かな意識注入はできなかったと思われる。それとは対照的な遺児参拝は茨城県の場合です。同志社大学図書館と東京の昭和館で靖国文集の茨城県分を調べました。

茨城県の一九五二年の遺児参拝を記録した靖国文集では、東京に近いという条件を使い、一泊二日の参拝を実に年に七回も行い、一年間に七六〇名を参加させています。なかでも特徴的なことは

一日目の夜、宿舍で二時間をかけて全員の座談会を行い、「お父さんの死の意義」について、「お父さん方が国民の身替わりになられた事実」を理解させようとしています。その後、一九五七年は年一〇回にわたり一九八二名、一九五八年は九回にわたり一九三〇名もの多くが参加していますが、宿舍での座談会は続いており、相当精力的に意識注入が行われたと感じられます。今後、大阪府の靖国文集と茨城県の靖国文集とを詳しく比較してみたいと思っています。

一緒に参拝した同窓生と会う

最近、一九五八年の遺児参拝に参加した同窓生の二人と連絡を取り、別々に会いました。一人はK君で、当時、中学校はちがいましたが、高校一年生で同級生になりました。縁があるもので、K君の二人の娘さんのうちの下の娘さんを中学校で担任しました。もう一人はS君で、彼とはクラスは違いましたが、中学校が同じで、高校一年生で同級生となりました。くしくも三人は高校一年の同級生でした。大学卒業後、彼は私立高校に勤めましたが、後に茨城市で小学校教員となり、校長で定年退職しました。二人に会って見ようと考えたのは、彼らが遺児参拝をどのように記憶しているか、その後の人生でどう影響を与えられたかを聞きたかったからです。

K君もS君も私から送られてきた靖国文集のコピーを見て、文集があったことを思い出しましたが、遺児参拝については何も覚えていないという答えでした。僕からの便りに驚きと戸惑いがあったようでした。私にしても、二〇〇七年八月に一年遅れで靖国

神社祭祀取消訴訟に参加する前に靖国文集を「あったように思うが？」と探したが見つかりませんでした。曖昧な記憶のなかに文集を忘却していたのでした。

K君のお父さんは、一九四五年六月にフィリピンルソン島ヌエバビスカヤ州で戦死されました。彼は兄弟五人の末っ子でした。戦前は裕福な家庭だったのですが、戦後、お母さんは五人の子どもを育てるため大変苦労されました。また、母親同士が遺族会での知り合いで、婦人部の靖国神社参拝には、私の母が行った三度の参拝中二度一緒に行っていたことを写真で確認できました。高校三年生で彼は家の経済状態を考え、大学進学は無理と判断し、就職コースを選び、卒業後は日立造船に就職しました。お母さんは一〇四歳までの長寿でした。

S君のお父さんは一九九四年にシベリアに抑留されて後、一九四五年九月七日に朝鮮の平壤の陸軍病院で戦病死しました。彼が小学校に入学した一九五一年に形通りの葬式をしたと覚えていました。骨も遺品も何もない葬儀でした。お母さんは最初は次男（S君の叔父）と結婚したのですが、最初の夫は病死し、三男であった彼の父と再婚し、その父は戦病死という境遇でした。戦後、お母さんは農業で家族を支え、舅と姑に仕え、彼を育てて来られました。

K君は遺児参拝後、靖国神社については意識せず生活してきたと言います。しかし、東京本社勤務時には、何度か靖国神社にお参りしたそうです。手を合わせる程度だったそうですが、このような形でその後も靖国神社と父が結びついていたのだと思います。S君には靖国神社に母と一緒にいった思い出がありました。一五、六年前に母が「一度、靖国神社に行きたい。」と言い出し

たので、連れて行きました。お母さんは生活に追われ、それまで一度も靖国神社に行っていなかったのです。お母さんは、二年前に九四歳で亡くなりましたが、遺品のなかに参拝時に作った短歌があり、「参拝できて、自分の胸に夫を抱きしめることができた。」という内容が書かれていました。彼はその歌をお棺に入れてやったそうです。また、参拝した時は四月で桜が満開で大変に美しかったので、葬儀の母の写真の裏を赤く塗ってやったとのことでした。戦争遺児には、靖国神社と父、母を結びつけるこのような心性が形作られていると感じさせられ、複雑な気持を抱きました。

私の場合にしても、今のように靖国神社との関係を真正面から見られるまでには、長い歳月がかかりました。高校生の時に、今まで抱き続けてきた「うちのお父ちゃん、戦争に行っているんやから、向こうで（中国で）人殺しているはずや？」という問いかけを母に向け、母からそれを厳しく、定された時から長い中断がありました。父が殺す側にいたという認識を具体的に行動に表すことができたのは、母が亡くなり、遺品のなかから「合祀通知」を発見し、合祀取消訴訟に合流することができた三年数ヶ月前のことです。

S君は小学校教員を続け、部落の識字学級で文字を教えたり、被差別の子どもたちの教育を熱心に取り組みました。現在は保護司を勤め、放課後の低学年の子どもの活動のコーディネーターも勤めています。今まで生きてきた彼の原点には、子どもの頃から抱き続けてきた父のいない悲しさや寂しさがあり、そこから弱い立場の子どもたちに感情移入してしまう、気持ちを投影している自分がある。それは自分の人生の原点になっていると思うと彼は語りました。彼は私のやっている靖国神社合祀取消訴訟に関心を

持ってくれたようで、私の参加している訴訟についても説明をしました。久しぶりの出会いで楽しく時間をすごしました。

おわりに

今年の六月に靖国文集を見つけ、大阪における遺児参拝の実相を探ってきましたが、これでその中間報告を終わります。今後、私にはぜひやりたいことがあります。文集のなかで「国家の嘘を見破った少女」（田中伸尚さんの言葉）をぜひ探し当てたい。そして、遺児参拝時の彼女の生活と心情、戦後を彼女はどのように生きてきたかをぜひ聞かせていただきたいと思っています。探し当てることができるかどうか、また、ご健在であるかどうか分かりませんが、新たな旅を始めたいと思います。まだ靖国文集（第一二集）を読み切っていませんので、ぜひ読みこみ、一九五〇年代の遺児参拝の実像、当時の戦争と平和をめぐる状況との関わり等を問いつづけて行きたいと考えています。あらたな発見がありましたら、また報告したいと思います。

(二〇一〇・一一・二〇)

追：（あわせて雑誌「世界」一二月号、田中伸尚さんの記事「戦後も『少国民』にされていた」を是非参照下さい）

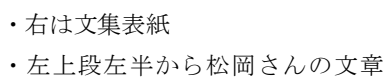
編集者より



① 天王寺公園での壮行会



② 大阪駅での見送り



もつ一度行こう靖国へ

退却

無言で初対面

洋

大般若の通見を代表して、靖國神社に参拝させてもらったことを
非難に充実に思つた。七月二十九日午後五時、列車は天主寺の駅を
静かにはなれ、一隊車馬へへと進んだ。東京へ近づくとつれて、
まだ知らぬ父の顔を腕の裏に抱いて見てゐた。七月三十日に、僕達の第一の目的である靖國神社に参拝した。界

